

【講演会等報告】

北海道南部のアイヌ文化を探る—道南のアイヌ文化に関する総合的研究

大矢 京 右

開催日 : 2013 (平成 25) 年 12 月 1 日 (日) 14:00-16:00
開催場所 : 函館市地域交流まちづくりセンター 3 階会議室
主催 : 函館アイヌ文化研究会
後援 : 北海道民族学会 他

はじめに

渡島・檜山地方を中心とした北海道南部は、これまで地域とアイヌ文化とのつながりについて積極的に語られることが比較的少なかった地域である。しかし近年、道南地域に残されたアイヌ関連物質文化資料に関する有益な論文が発表されるなど、道南地域とアイヌ文化のつながりについて改めて見直されつつある。本シンポジウムでは、函館を中心とする道南地域とアイヌ文化とのつながりについて、函館アイヌ文化研究会に所属する 4 人の発表者が、歴史学・言語学・民族学などの様々な研究方法で得られた成果について発表を行った。

まず大野徹人氏 (様似民族文化保存会会員) は、近世以降の文献に見られる道南のアイヌ文化に関する記録を集成することで「道南アイヌ」の歴史と文化を概観するとともに、大谷大学博物館所蔵北里蠟管に記録された 1931 (昭和 6) 年録音の八雲アイヌの音声記録の解析を行った。

続いて大矢 (市立函館博物館学芸員) は、高度経済成長期の函館における旭川アイヌの商業活動について、新聞記事や統計資料を基に作成したデータベースと当時の関係者への聞き取り調査で明らかになった事実について紹介した。

続いて荒城元康氏 (社団法人北海道アイヌ協会函館支部副支部長) は、自らの父が函館で土産店を営んでいたことから、木彫りで生計を立てていた父の思い出と、自ら参加した 1963 (昭和 38) 年 2 月 11 日に函館で開催されたイオマンテの思い出について語った。

最後に谷杉アキラ氏 (箱館寫真伝習舎代表) は、千島樺太交換条約締結に基づくクリルアイヌのシコタン島強制移住に立ち会った函館県の通辞小島倉太郎の足取りを追い、函館・根室およびその近郊地域で取材・撮影した写真を元にクリルアイヌの運命について発表した。

以下に各人の発表内容の概要を記載する。



シンポジウムのポスター



北里の報告に掲載された八雲アイヌ
【北里 1932】

道南のアイヌ文化とアイヌ語（大野徹人氏）

かつて道南地域においてアイヌと和人がどのような関係を持っていたかについては史料も少なく、はっきりわからない部分が多い。中近世においては『諏訪大明神絵詞』（1356年）、『新羅之記録』（1646年）、上原熊次郎『蝦夷地名并里程記』（1824年）、松浦武四郎『東西蝦夷場所境調書 巻』などに道南のアイヌに関する記述が散見され、山越内を和人地と蝦夷地の境としながらも、文化年間頃には戸井・恵山・南茅部といった現在では函館市に行政区分される地域にもアイヌが居住していたことが読み取れる。しかし近代以降になると急速に和人化が進み、アイヌの文化を学ぼうと1878（明治11）年に森を訪れたジョン＝バチェラーは、「も早アイヌ人は極くわづかで大和人が大部分を占て居るので、アイヌ

の生活を少しも見る事が出来ないので失望致しました」【バチェラー1928】と述懐している。その後バチェラーは落部でアイヌ語の採録を果たすが、アイヌ自身が「アイヌと思はれるのを大変恥じて居る」【バチェラー1928】ことを感じ取っている。

そういった歴史をたどった道南のアイヌの言語と文化についても、多くの地域では記録がほとんど残らないままに衰退していったようである。ただし、そのうち八雲と長万部については、比較的記録が残されている。長万部の司馬力八翁や司馬力弥翁、八雲の椎久年蔵翁、落部の辨開胤次郎翁らはその中でも特に重要な役割を果たしており、金田一京助、知里真志保、更科源蔵、服部四郎ら研究者が聞き取りを行っている。今回の調査では、北里闕が1931（昭和6）年に蝸管レコードに録音した八雲アイヌ（椎久年蔵翁・冷田イコトル翁・冷田フツチャリ媼）の音声記録（大谷大学博物館所蔵）について特に解析を行い、服部四郎による『アイヌ語方言辞典』の八雲方言に関する事項を合わせてみることで、八雲独特のアイヌ語表現の一部について理解することができた。

函館観光とアイヌ文化（大矢京右）

明治以降、道路・鉄道・連絡船などの交通網の急速な発達による北海道観光振興が進む中で、北海道特有の「アイヌ文化」が北海道観光の象徴的存在として注目を浴びるようになると、アイヌ自身の手による盆や衣紋掛けなどの木製土産品が多く生産されるようになるとともに、「催し物」としての熊祭りーイオマンテーが催されるようになる。中でも大正末年から昭和初年にかけて旭川アイヌの松井梅太郎が制作し始めたアイヌの木彫り熊は、北海道士産の代表格として全国的に認知されるようになり、以降道内各地の観光地に木彫りを生業としたアイヌが出稼ぎ・移住していく端緒となった。

戦後高度経済成長期、函館は北海道の中でも特に地理的・文化的優位性を持った宿泊型観光拠点として観光業たけなわとなり、「函館の奥座敷」と呼ばれた湯川温泉街には宿泊客が集中したことで土産店が多く出店し、当地において土産品としてのアイヌの木彫り熊

の需要が著しく拡大した。旭川出身のアイヌである川村泰一（1919－1981）は、登別で観光業に従事している際に青函連絡船の発着地である函館での木彫り熊制作・販売に着想し、1953（昭和28）年から1960年代前半頃まで函館で湯川物産館（川村アイヌ民芸店）を経営した。また、同じく旭川出身の荒城初治（1921-1974）は、木彫りの師である川村泰一を頼って1955（昭和30）年頃に函館に移り住み、1961（昭和36）



アイヌコタンの史跡館【函館市 1965】

年頃に独立して北海道旭川アイヌ民芸協同組合函館直売所（荒城土産店）を経営した。特に荒城初治は積極的に広報活動を行い、1963（昭和38）年には私設の博物館「アイヌコタンの史跡館」を開館。旭川から川村カ子トを招聘して開館記念のイオマンテも行うなどしたことから、多くの観光客と函館市民がその存在を知るところとなった。

アイヌ文化が戦後函館における一大観光要素となり得たのは、旭川アイヌの ①長い年月と環境にはぐくまれた伝統文化に関する知識・技術 ②商業経済への柔軟な適応と知識・技術の援用 ③函館の持つ地理的優位に着目した先見の明 ④コネクションと広報の有効的活用があったために他ならない。

父荒城初治について（荒城元康氏）

自分自身アイヌであるが、これまでとくにそれを意識したことはなく、2009（平成21）年の社団法人北海道アイヌ協会函館支部立ち上げの時から改めてアイヌについて意識し、少しずつではあるが勉強するようになった。

父荒城初治は旭川近文生まれで、小学校の頃から砂澤清さん（後に川村泰一に改名）について木彫りをやっていた。1953（昭和28）年か1954（昭和29）年頃に函館に来て、湯川町で土産店を開き、住み込みの職人を抱えながら木彫り熊を中心に商売していた。住み込みの職人以外にも常時7～8人くらいの職人が木彫り熊を卸していたが、中にはへたくそなものもあって、父が「猫みたいなクマ彫りやがる」と怒っていたこともあったが、とにかく何でもよく売れた。夜明けとともに観光客が動き出すので、朝は日の出とともに店を開け、夜も夜景目当ての観光客が遅くまで活動するので、22時か23時まで店をやっていた。観光シーズンには毎日函館駅前に4～5人でアイヌ衣服を着て出かけ、ムックリを弾いたり踊りを踊ったりした。父は仕事熱心で、食事もとらずに夜中まで黙々と木を彫っていた。弟子もたくさんとったが、自分には「おまえらの時代にはこんな技術はいらなくなる」といって、ノミにさわらせてすらもらえなかった。おそらく父はその後の木彫り熊の衰退を見通していたのではないかと思う。

1963（昭和38）年に函館根崎競技場で父が主催したイオマンテは、よく覚えている。風がとても強い寒い日で、ばあさんにひっついて寒さをしのいだ。イオマンテにはたくさんの人が集まっていたが、動物愛護とかがあってその場で熊を殺すことはなかった。店に戻

ってきから父がライフルで射殺したが、小さい頃から一緒だった熊が死ぬのは本当に悲しかった。その後も何回かイオマンテをやって、その都度父がライフルでとどめを刺すので、そのうちライフルの音がしたら「あっ、熊が死んだな」と思うようになった。熊は小さいうちは店の前で鎖につないで飼っていたが、人や飼い犬に怪我を負わせるようなことがあってから、飼うのをやめてしまった。

小島倉太郎アルバムから探る函館～根室～千島写真紀行（谷杉アキラ氏）

小島倉太郎（1860-1895）は、明治初年の函館でロシア語通辞として開拓使・函館県・北海道庁函館区に奉職した官吏であり、函館が国内でもいち早く開港した国際都市であったこともあって、ロシアに限らずイギリスや中国などの要人との交渉にも広く当たっていた人物である。小島は 1895（明治 28）年に夭逝するが、その遺品は学術的に貴重な資料として、市立函館博物館をはじめとする道内の公機関に寄贈されており、中でも「小島倉太郎アルバム」には明治初期に撮影された 141 枚もの写真が貼付されている貴重なものである。本調査では小島倉太郎アルバムを中心とした小島の遺品を基に、小島がロシア語を解するクリルアイヌとの通訳として同行した 1884（明治 17）年のシコタン島強制移住の足取りを追った。

小島一行は 1884（明治 17）年 6 月 22 日に函館を発ち、根室を經由して北千島シュムシュ島に至り、クリルアイヌを「説得」してシコタン島への移住を首肯せしめ、移住先のシ

コタン島でクリルアイヌの生活基盤が整うのを見届けた後に 8 月 26 日に函館へ戻っている。本調査では函館および根室近郊で実際に小島の足跡をたどり、実際に小島が見たであろう景色や訪れたであろう施設跡地などを写真に収めた。そして当時と現代の地図や写真をコラボレーションさせることで、一般の方でも小島とクリルアイヌの記憶を追体験できるような作品に仕上げた。このような手法は、今後のアイヌ文化理解・普及における新たな方法論として確立できるものと考えている。



根室納沙布岬から千島方面を望む
【谷杉アキラ氏撮影】

おわりに

本シンポジウム開催当日には 90 名もの参加者があり、改めて道南地域におけるアイヌ文化への興味関心の高さが浮き彫りとなった。よって今後も函館アイヌ文化研究会として継続的に調査・研究・公開事業を行っていくことを計画している。本研究ならびにシンポジウム開催に当たり、研究助成をいただいた公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構および本シンポジウムへの後援をいただいた北海道民族学会をはじめ、ご協力いただいた各機関に深謝したい。

参考文献

秋葉実 翻刻・編

1996『松浦武一郎選集 一』北海道出版企画センター 札幌市
ジョン・バチェラー

1928『わが記憶をたどりて』文録社 東京都
服部四郎 編

1964『アイヌ語方言辞典』岩波書店 東京
北里 闌

1932『日本語原研究の道程 続編 日本語の根本的研究 追補』紫苑会 大阪府
函館市・函館市観光協会 編

1965『'65／函館』函館市・函館市観光協会 函館市
函館アイヌ文化研究会 編

2014『北海道南部のアイヌ文化を探る―道南のアイヌ文化に関する総合的研究―』函館アイヌ文化研究会 函館市

(おおや・きょうすけ／市立函館博物館)